

ヨーロッパのオウム・新世界表象・アンデスの魔物

大平秀一（東海大学）

キー・ワード： 話す鳥、オウム喰い、食人、ピシュタコ（脂取り魔）、ナカク

Parrots in Europe, Representation of the New World, Andean evils “Pishtaco”

SHUICHI ODAIRA (Tokai University)

Keywords: Talking bird, Papagayo, Psittacophagy, Anthropophagy, Pishtaco, Nakaq

クリストバル・コロンやアメリゴ・ヴェスプッチらの探検・航海により、あるはずのない場所（南半球）から未知の大陸が出現し、アジア・アフリカ・ヨーロッパという3つの部分からなるヨーロッパの伝統的な世界概念は崩れ去った。よって、世界の第四部分・新世界・アメリカと呼ばれた地域は、新奇・異質・異様・驚異といった観念と共に登場したことになる。先住民には、強い他者性が付与されて歪んだ眼差しが向けられ、裸体・羽毛装飾・食人・異様に豊かな富などが、新世界表象を代表する要素・記号と化していった。本報告では、これらの中からオウム・羽毛を取り上げ、内奥に潜むヨーロッパにおけるその意味を確認して新世界表象の背景を捉え直した。また、オウムがアンデスの脂取り魔の呼称と化していることを指摘した。

コロンは、第1回航海において、アジアに到った証拠として、最も鮮やかで魅惑的な色のオウム40羽を持ち帰っている。1500年、喜望峯経由でインドに向かおうとしたカブラルは、西に流されてブラジルに漂着し、そこを「パパガ（オウム）の土地」と呼んでいる。1502年のCantinoの地図には、ブラジルにすでに3匹のオウムが描かれている。以後、新世界表象には、必ずといってよいほど、オウム・（多彩な）羽毛装飾が伴うようになり、同地域の記号と化していく。豊かな森の広がる新世界に多く生息していたため、その鳥が同地域のシンボル・記号と化するという単純な論理ではない。というのは、ヨーロッパでは、ギリシャ時代にはすでにオウムが飼われており、多様な意味が付与されていたためである。

ヨーロッパの著作におけるオウムの記述は、クテシアスの『インド誌』（～B.C.398）、アリス

トテレスの『動物誌』（B.C.344-342）等にすでに認められ、いずれも話すことに着目されている。B.C.327年、アレクサンダー大王の東方遠征以後、ヨーロッパに多くのオウムがもたらされ、ペットとして飼われるようになった。ローマ時代～中世には、プリニウスの『博物誌』（A.D.77）をはじめ、地誌・歴史書・料理書・図鑑・文学作品等、多様なジャンルでオウムの記述が残されている。また、ローマ時代のモザイク画・壁画のほか、聖書の装飾・絵画・宗教画、そして織物などにも、オウムの図・モチーフが多く示されている [Boehrer 2004a]。

神聖ローマ皇帝フリードリッヒ2世は、親交の深かったアイユブ朝の第5代スルターン・アル＝カミールからおそらく中国を通して得たコバタン（インドネシアのスラウェシ、小スンダ列島等に生息）あるいはキバタン（オーストラリア、ニューギニアに生息）を贈られており、1241～44年の記録・絵の写本がバチカン図書館に所蔵されている [Dalton et al. 2018]。

ヨーロッパにおいて、オウムはインドの（神聖な）鳥と捉えられていた。よってコロンはアジアに到った証拠になり得ると考え、それを持ち帰ったことになる。話しはするものの、人間と同等の能力をもつわけではなく、他者性・劣等生を帯びる人間がオウムとして捉えられこともある。

オウムを食べることは、基本的には回避されていた。しかし、ローマの有力者の間では、珍味を食する慣習があり、例えば皇帝エラガバルスはオウムを振る舞い、食していたことが書き残されている。料理書 *De Re Coquinaria* (3c 後半) も、オウムの調理法に言及しており、これは1498年に印刷されている [Boehrer 2004b]。

オウム・インコ等の話す鳥は、反復のシンボルであり、自分の声の「鏡」でもある。よってその背後には、「自己」(self)の観念の付与が可能で、「自己」の生き写しにもなり得る。それを食する行為は、「自己」の殺害・摂取、すなわち食人と同意義となる。それが故に、航海者たちも「オウム喰い」をタブー視している傾向が認められる。

ローマ～中世・近世において、変化を経ながらも、エキゾチシズム・東方の豊かさ、神秘性、神性、聖母マリア、予知・予言能力、地上の楽園で創造される鳥、天国から来た鳥、奇跡的・超自然的存在、権力者へのお世辞・社会的風刺の題材、滑稽、野蛮性、劣位性、墮落など、オウムは多様な観念で捉えられている [Boehrer 2004a]。よって新世界表象の中のオウムは、必ずしも野蛮性・劣位性・熱帯のシンボルというわけではない。第3回航海で南米大陸北岸に達したコロンは、その奥に想定される大陸をインド・東方にイメージされていたエデンの園と捉えている。一方でオウムは、食人の観念とも深く関わっている。

オウムの名称には、papagayo (西語)、papegay, papegau (仏語)、papagalo (伊語)、Papegay (独語)、poppingay (英語) があり、仏語では12世紀にはすでにその使用が確認されている。16世紀以後には loro, guacamayo (西語)、perroquet (仏語)、parrot (英語) といったように多様化してくる。これらに加えて、古い表記の一つとして、ラテン語の psittacus (主格) がある。その単数与格と奪格は、psittaco となる。もちろんこの語は、スペイン語にもなっており、例えば Maria Moliner の辞書では、Psitac- を「ギリシャ語の psitakós (papagayo [オウム]) に由来をもつ形態」と説明し、Psitacismo: 丸暗記の教授法、psitacosis: オウム病、psitaciforme: オウムの足の形態、そして Psittacus を伴うオウム・インコ・ヨウムの固有名詞等が示されている。英語の psittacophagy は「オウム喰い」を意味する。

“psi”はギリシャ語の23番目のアルファベット Ψ である。ギリシャ哲学の観念で、息・心・魂・命・を意味する「プシケー」(Ψυχή、ラテン語: Psyche、西語: Psique) に代表されるように、ギリシャ語では“psi”は発音される。よって

psitacus/psittaco は、「プシタクス/プシタコ」と読まれてしかるべきで、それはアンデスの脂肪取り魔・「ピシュタコ」とほぼ同じ音になる。

「ピシュタコ」は、1560年の Santo Thomás のケチュア語・スペイン語辞書にすでに pistac という表記で収録されており、「Nacac. o pistac: 斬首者」、「Nacani, gui. O pistani, gui: 首を斬る」とある。Juan Martínez (1586) の辞書には、「Pistani: nacani を見よ」とあり、nacani には、「家畜を解体する、首を斬る、四裂きにする」とある。González Holguín の辞書には収録されていない。

「ピシュタコ」は、これまでの民族誌的記述を通して、都市性・他者性(白人等)が指摘されてきた。しかし語源を考えるとそれは表層的なもので、歴史的にはその内奥にオウム・自己性・自己による犠牲といった観念が内在していた可能性が高い。スペインのグラナダでは、同様の脂肪取り魔 Sacamanteca の存在が知られており、背後にロマ人(「ヒターノ」)が意識されることもある。またヨーロッパの処刑文化では、人間の脂や血液が病気治療に用いられていた。誰かがスペイン・ヨーロッパの土着的な観念をアンデス先住民に伝え、その意味の同質性が媒介者と先住民の間で相互に共感・共有された可能性がある。

【主要参考文献】

Boehrer, Bruce Thomas, 2004a, *Parrot Culture: Our 2,500-Year-Long Fascination with the World's Most Talkative Bird*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

DOI: <https://doi.org/10.9783/9780812201352>

Boehrer, Bruce Thomas, 2004b, The Parrot Eaters: Psittacophagy in the Renaissance and Beyond. *Gastronomica*, Vol.4, No.3, pp.46-59.

DOI: <https://doi.org/10.1525/gfc.2004.4.3.46>

Dalton, Heather, Jukka Salo, Pekka Niemelä and Simo Örmä, 2018, Frederick II of Hohenstaufen's Australasian Cockatoo: Symbol of Détente between East and West and Evidence of the Ayyubids' Global Reach. *Parergon*, Vol.35, No.1, pp.35-60.

DOI: <https://muse.jhu.edu/article/698090>